

山陰地方の温泉史

立木 悳 三

1. 先史・原始時代 (B.C.～592)

沐浴のことが初めて歴史の上にあらわれてくるのは紀元前約二千年頃、古代インド、モヘンジョ・ダロの古代遺跡にみる大浴場跡やヨーロッパでもこれよりは少しおくれるがエーゲ文明の中心地クレタ島、ギリシャ、シシリー島などで風呂場の遺跡などである。

くだってギリシャ時代からローマ帝政時代に入るとさかんに公衆浴場(テルム)がつくれ、入浴の習慣、入浴風景、入浴制限のことなどが史実としてあらわれ、なかでもカラカラ帝のカラカラ大浴場は有名である。

一方イギリスのバース温泉の発見伝説、スイスにおける温泉利用、イタリアのヴェス・ビオ火山の爆発によるポンペイ温泉の埋没(79年)、ヒポクラテスによる温泉医学の開発など歴史上に散見する西欧の温泉記録に呼応して、秦の始皇帝の温泉浴(B.C.240頃)、漢の王褒の「温湯の碑」など東洋でも、「温泉」という言葉がしばしばあらわれている。

しかし、この頃わが国では成務天皇の御代に紀州湯の峰温泉が「みそぎ」の場となったことが記録されているにすぎず、この時代に山陰地方の温泉が史実としても伝説としても登場する機会はない。

2. 飛鳥・奈良時代 (592～793)

この時代を特徴づけるのはまず天皇の温泉地行幸、高貴な人達の温泉行である。しかし比較的都の近かった山陰の城崎温泉でもまだその史実はあらわれていない。

そしてまた仏教の伝来にともなって温浴の思想がその布教への大きな手がかりとなった時代でもあるが、これにともない高僧たちによる温泉発見伝説がつたえられ、山陰地方でもつぎのように温泉発見が伝えられている。城崎温泉・鴻の湯(629年頃—鴻)、同・まんだら湯(720年—道智上人)、有福(650年頃—天竺の法道仙人)、木津(742年—行基)などである。ここで特筆すべきは城崎温泉・曼陀羅湯を発見したといわれる道智上人による温泉寺の創建で、「末代山温泉寺」の勅号を賜った。真言宗別格本山で城崎温泉の支配的立場にたち密接不離の関係を保ちながら現在にいたっている。

この時代の日本の温泉史に誇りうるものは山陰の名湯出雲玉造温泉で、出雲風土記の記録に残って面目躍如たるものがある。出雲国国造家の神賀詞のさいの潔斎の場となり、また民衆の憩いの場としても栄えた玉造温泉を“老いたるも少きも……日に集ひて市をなし、續粉燕楽す。ひとたび濯げばすなわち形容端正しく、再び沐すればすなわち万の病悉く除ゆ。古くより今にいたるまで験を得ずといふことなし。かれ、俗の人、神の湯といふなり。”と詩趣ゆたかにPRしている。また湯村温泉については“川の辺に薬湯あり。一たび浴すればすなわち身体穢平ぎ、再び濯げばすなわち万の病消除ゆ。男も女も老いたるも少きも、昼夜息まず、駱駝なり往来ひて験をえずといふことなし。かれ、俗の人号けて薬湯といふ。”と温泉医療のことも記されている。

話は中国にとぶが唐代の有名な詩人白楽天の長編roman詩「長恨歌」—春寒うして浴を賜う華清の池、温泉水なめらかにして凝脂を洗う……—で名高い唐の玄宗皇帝が華清温泉で楊貴妃とのロマンスに明けくれたのもこの頃のことであった。

3. 平安時代 (794~1191)

この時代には修善寺温泉の独鈷とっこの湯を発見した空海、有馬温泉中興の恩人仁西など高僧が輩出して次第に仏教が大衆に浸透定着する時代であった。山陰地方でも高僧、貴人などによる温泉発見伝説が続出している。

| | | | |
|----------|---------|------------|------------------------|
| 806 | (大同元年) | 海潮温泉 | 薬師如来 |
| 859頃 | (貞観年間) | 岩井温泉 | 藤原冬久 |
| 860 | (貞観二年) | 湯村温泉 (兵庫) | 慈覚大師 (882-908) 弁朝臣照・史実 |
| | | 湯の郷温泉 (岡山) | |
| 916 | (延喜十六年) | 俵山温泉 (山口) | 白猿 |
| 962 | (応和二年) | 吉岡温泉 | 葦岡長者 |
| 987~1011 | | 湯原温泉 (岡山) | 性空上人 |
| 1164 | (長寛二年) | 三朝温泉 | 大久保左馬之祐 |
| 1183 | (寿永二年) | 川棚温泉 (山口) | 怡雲 |

延長五年(927)の延喜式は、巻九、巻十で全国官社3132座を列記し官社帳ともいわれているが、それに列する神社は式内社と呼ばれ社格を権威づけるものとされている。その中に温泉に関する神社は全国で有馬温泉・湯泉神社、道後温泉・湯神社など11社が載せられている。この中に山陰地方で因幡国巨濃郡の御湯神社(鳥取県岩井温泉)と出雲国意宇郡玉作湯神社(島根県玉造温泉)の2社があげられていることは山陰地方の温泉の古さと格式を物語る証左であろう。

さて平安文学を代表する枕草子、源氏物語には、いずれにも温泉のことがしるされている。紫式部の曾祖父に当り三十六歌仙の一人藤原兼輔卿は但馬城崎温泉に遊び

夕月夜おほつかなくを玉くしげ

二見の浦は明けてこそ見ぬ

などと唄ったのは延喜5年(905)のことであった。

4. 鎌倉・室町時代 (1192~1333, 1334~1573)

鎌倉時代に入ると仏教にちなむ施浴、各種の風呂講、五木八草湯など薬湯の普及、高貴な人達の汲湯湯治などがさかんに行なわれたが、この傾向は足利時代にはさらに施浴用の湯山、湯田の寄進などが行なわれて逆修風呂、立願風呂などと発展し、施浴は次第に庶民のものとなってくる。

一方薬湯の普及とは別に天然温泉の汲湯による湯治が高貴の人達の間で流行した。これは温泉湯治の簡略な手段であり都から近い有馬温泉の湯が利用され湯山湯また有馬湯と呼ばれていた。

そして温泉湯治も次第に大衆化していった。文明17年(1485年)堯恵法師の「北国紀行」のなかで、また文亀2年(1502年)連歌師宗祇がその弟子宗長を伴って草津、伊香保温泉を訪れたこと、また一休和尚が有馬温泉に出かけたことなど、次第に当時の温泉の様子が明らかにされはじめる。

この時代城崎温泉に後堀河天皇の皇后安嘉門院が行啓(文永4年-1267)し、また弘長元年には山階左大臣西園寺実雄は「新後撰集」の中で

思ひおく都の花のおもかけの

たちもはなれめ山の端の雲

と詠んでいる。

また少し時代は下って、「徒然草」の著者吉田兼好も城崎温泉を訪れて“花のさかり但馬の湯に帰る道にて

しほらしよ 山わけ衣春雨に

霰くも 花も 勾ふたもとは

と春雨にぬれてゆく温泉行の心境をうたいあげている。さらに義政の頃連歌師宗祇法師は“文月の末但州二見の浦を見にまかりける、伊勢に同じ名所あり、過ぎ来し春は勢州の芸の浦をよみしに、秋のいまは引きかえてまたこの国のここにたどる”と、花を東月かけ西に二見かなと城崎温泉の二見の浦に遊んでの句を残している。

天文17年(1548)には鷹司冬平公は飛鳥井雅教卿とともに城崎温泉に来遊して、いづれも数寄の道で温泉寺に参詣して蹴鞠を催した。このように城崎は都から近かったのである。

さて温泉の大衆化は入湯料、湯治掟、湯治の心得をさとす湯文などの出現が証明している。温泉の発見は相変わらず続き、至徳年間(1384~1386)の湯原温泉(岡山)の砂湯、文龜元年(1501)の勝見温泉(浜村)、永正4年(1507)の湯田温泉(山口)、永祿3年(1560)温泉津温泉などこの時代の発見であった。

施浴の普及は、功德湯などいろいろな形式で大衆化した。山陰には建武年間に有福温泉の慈善湯があった。

湯治といえば温泉を対象として湯治という言葉が表われたのは山口県の湯田温泉が最初である。

『大内家壁書』によれば長祿3年(1459)“夜中に湯田の湯へ入ること、ただし、湯治の人ならびに女人同農人等はこのぞく”とある。

鎌倉から南北朝室町幕府も終りに近づくと、次第に戦国の世の中に移行して、諸国では群雄が割拠して戦に明け暮れる日々が続いた。信玄のかくし湯は有名であるが、山陰地方でも戦にきずついた将兵たちの温泉治療は例外ではない。船上山で後醍醐天皇をたすけた名和長年との戦に敗れた北條の部下、隠岐の岩佐秀貞、長門の三船資成が美作国に敗走して湯眞賀の湯に矢疵をなおしたのが元弘3年(1333)、また石見銀山をめぐる毛利、尼子の攻防で尼子の臣小笠原長智が邑智郡の大谷の湯に矢疵を癒したのが永祿元年(1558)春、同じく尼子の臣三笠城主牛尾春重が海潮温泉に重傷をなおしたのが元龜年間のことであった。

また汲湯についても元龜年間には高田城中に山中鹿之助の妹婿佐伯辰重の刀傷を治すため美作の樽(た)温泉の湯を運んだと伝えられる史実がある。

この時代には江戸時代に隆盛をきわめた銭湯のはしりがみられ、室町中期以後、公家、武家の間でしばしば風流淋汗(一種の接待風呂)も流行した。

5. 安土・桃山・江戸時代(1574~1608, 1609~1867)

有馬温泉をこよなく愛し、その修復につとめ、さらには大規模な草津温泉湯治をはたしえなかった秀吉の時代から江戸三百年、そして幕末にいたるこの時代は、信玄のかくし湯にみられるように一握りの戦国の武将たちの所有から次第に温泉が大衆のものになってゆく第一期の温泉大衆化の時代であった。時代が新しいため各地に各種の記録が散見して温泉研究には非常に興味ある時代でもある。

先づ藩主など大名の入湯についてみると、参勤交代のさいの有馬、箱根など道中の温泉入湯はさておき、国元に帰った藩主は藩内の温泉地には必ずといってよいほど御茶屋もうけ、入湯するのが楽しみであった。

鳥取藩には岩井、吉岡、勝見(浜村)に御茶屋があり、松江藩には玉造、海潮そしてさぎの湯にその記録がある。入湯に出かけない場合は藩内の温泉から汲湯して城内で入湯した。鳥取藩主の「御入湯日記」は仙台藩主の青根温泉の入湯記とともに詳細に記録されている。

これらによれば湯治中の禁令、道中の様子、湯治先での社寺参詣、城中からの報告及び処置、帰城のさいの礼など興味深いものがある。鳥取藩主三代吉泰は享保11年(1726)4月5日から5月3日まで勝見温泉に入湯したが、その「勝見御入湯日記」から当時の入湯の様子をみてみよう。

4月5日＝家老等の見送りをうけて行列が出立する。行列の次第

御押－御供目付－御爽箱－御甲箱－御具定箱－御掛硯－御薬篋筒－同七厘－御簀箱－御馬－御揃箱－御揃弓－御台笠－御立傘－御対鎗－御歩侍－御大鳥毛－御腰物筒－御薙刀－御駕籠－御近習－御歩侍頭－御鍵奉行－御中小姓－御八人－御供横目－御草履－御十文字－御直鎗－御跡爽箱－御茶辨当－御小辨当－御馬－小便－供

千代川安長渡しを渡って浜村入口に差しかかると、御郡奉行、御蔵奉行の罷出、通掛りの御目見と出迎え、七時勝見御茶屋御着（この日四半時出駕とあるから約8時間の行程）

6日＝八幡、福田稻荷へ御参詣

7日＝宿・勝宿神社へ御参詣

8日持寿院、勝見薬師へ御参詣

9日＝青谷、舟磯、小谷観音へ御参詣

10日＝日光、常松、酒ノ津観音へ御参詣

11日＝下石村へ、鳥取より使者

12日＝八幡村藤五郎方へ寄り御弁当

13日＝重山村へ

14日＝鹿野の草屋兵助方へ、当村および福田稻荷へ

15日＝日光、八幡村へ

18日＝讓伝寺、長泉寺へ

と連日他村へ遠出し足を踏まない地はないほどである。しかもこの間ひっきりなしに城からの報告をうけている。

一方、温泉湯治の大衆化にともなって湯かむりの風習、よもぎの湯、丑湯、花湯など季節湯治のこと、湯治期間中の楽しみのことなど……当時の様子を彷彿とさせる記録がたくさん残されている。

吉岡温泉の花湯は享保元年（1716）にはじまったが、“湯かむり唄”の風習がさかんになったという。また丑湯のことは宝暦8年6月12日に吉岡温泉ではじまっている。季節湯治のなかで丑の湯、丑湯治はいわゆる夏湯治の一種であるが多くは日帰りであって長くは1～2泊とされていた。これは土用の丑の日の湯治のことで全国的に行なわれているものだが、この日の湯治は“一日千日の効”、“一日三年の効”があるとされている。このように岩井、吉岡、勝見の温泉では入湯客の混乱が予想されたので、土用丑の日に藩では御山奉行を出張させて夜更けまで取締りにあたらせている。

取締りといえば、温泉地での入湯客の心得について各温泉地に古くから数多く残されている。山陰地方でも明暦元年（1655）—岩井温泉、元禄3年9月（1690）—作州湯原温泉、正徳4年（1714）—作州真賀温泉、享保7年（1722）—勝見温泉などがあるが、男女混浴の禁については「女湯へ男入可らず事」とか、賭け事については「賭之諸勝負堅停止之事」などがある。

さて藩では温泉地の管理については御茶屋給、湯運上（入湯税）のことなどで厳重な規定をもうける一方、百姓、町人などの湯治については入湯願を提出させている。鳥取藩内の庄屋などから藩内では岩井、吉岡、勝見、三朝の温泉に、また他藩にわたるものでは但州城崎（湯島）、雲州玉造、作州湯原などの温泉湯治願がさかんに出されている。大体期間は三廻り（21日間）がもっとも多く、一カ月にわたるものもあった。

この時代の温泉地の模様については後でのべる入湯記のかずかずに詳細に記されている。

全国に散在する各温泉地は温泉大衆化の進展と相まって文人墨客が訪れたのであるが、山陰地方の温泉地にも多くの入湯記や紀行文が残されている。

▽城崎温泉

- 「湯島記」 菊地武雅 宝永2 (1705)
- 「但馬湯嶋道之記」 河合章堯 享保18 (1733)
- 「但州城崎温泉論」 祐淳 安永3 (1774)
- 「藤妻冊子」(秋山記) 上田秋成 文化3 (1806)
- 「但州湯島の道草」 安藤形影 天保9 (1838)

▽勝見 (浜村)

- 「勝見名跡誌」 上野忠親 宝暦2 (1752)

▽三朝・関金

- 「伯耆民談記」 松岡布政 寛保2 (1742)

これらには当時の各温泉地の湯宿、宿泊賃、湯治客数、自炊風景、遊び場風景、物見遊山、行事、温泉みやげのことなどが記され、温泉地が時の流れにより変化しながら発展してゆく姿を把握することが出来る。そして山陰の温泉と全国各地の温泉を比較するためには林羅山『摂州有馬温泉記』、貝原益軒『有馬湯山記』、著者不明『豆州熱海温泉道知辺』、鈴木重郷『箱根塔之沢温泉記』、十返舎一九『善光寺草津道中金草鞋』などが参考になる。

江戸時代も中期を過ぎる頃蘭学を中心とする西洋医学の伝来により、温泉科学や医学の研究が進められるようになった。後藤良山、服部活齐、香川修徳、拓植龍州などの学者は、温泉の分析温泉医学に関する各種の文献を残すとともに、大衆向けの温泉湯治案内書も出版している。たとえば

- 1724 平活斎 「温泉小説」
- 1728 宇田川榕菴 「諸国温泉試説」
- 1794 原雙桂 「温泉考」(温泉小言)
- 1809 拓植龍州 「温泉論」
- 1822 小林一茶 「湯田中温泉の記」

など枚挙にいとまはないが、この頃城崎温泉でも温泉医学の研究がはじまっている。後藤良山の説をついだ香川修徳は享保19年(1734)城崎温泉に来遊し新湯に浴したが、その著『一本堂葉選』でこの温泉の卓効あるをのべて“我邦諸州温泉極多而但州城崎新湯為海内第一泉”と激賞した。現在の一乃湯である。またこの頃入湯法としては益軒の「有馬湯山記」とともに有名なのが倉谷安斎「但馬城崎湯治指南車」一文政2年(1819)がある。

文化、文政の頃「温泉番付」が出版されはじめたが、城崎温泉は西の関脇の地位を不動のものとし、但馬湯川原の湯(但馬湯村)、伯州(因州?)徒見の湯(勝見)、石州川村の湯、出雲三沢の湯(湯村)などが見えている。この順位は疾病に対する効果を第一として考えられていたようで、東の大関は上州草津の湯、西の大関は摂州有馬の湯、ついで但州城崎の湯であった。

6. 明治・大正時代 (1868~1912, 1912~1926)

明治時代に入って西欧科学の導入により急速な理学の進展をみて新温泉の開発が行なわれてた。また鉄道を中心とする交通網の発達により温泉地は次第に発展をとげ、文人墨客による温泉地の紹介は一層これに拍車をかけることになった。山陰地方では、

- 1872 (明5) 東郷温泉 (鳥取)
- 1884 (明17) 浜村温泉 (鳥取)
- 1900 (明33) 皆生温泉 (鳥取)
- 1902 (明35) 浅津温泉 (鳥取)
- 1904 (明37) 吉方温泉 (鳥取)

| | | |
|------|-------|---------------|
| 1909 | (明42) | 鷺の湯温泉(島根)—新泉源 |
| 1911 | (明44) | 木津温泉(京都)—新泉源 |
| 1925 | (大14) | 末広温泉(鳥取) |
| 1926 | (大15) | 松崎温泉(鳥取) |

などつぎつぎと新温泉が堀さくされている。

明治の初期には江戸時代からの銭湯の風習が流行して、各温泉地から運んだ温泉華による再生温泉が東京を中心に風靡していた。温泉地では温泉客の増加にともない藩政時代における湯運上に相当する営業税が課せられ、種々の禁制が定められる一方、引湯権、温泉利用権の問題が抬頭してきた。明治12年島根県令の営業税、雑種税課額並徴収規則(当時鳥取県は島根県に属していた)によれば県下の温泉地はつぎのように分布していた。その第14条に、宿舎は左に記載の地を1等、2等とし、余は悉皆3等として課税するものとする。但し1、2等各町村とも連檐を除くの外総て3等の部分とする。

1等の部

石見国 邇摩郡温泉津

2等の部

出雲国 意宇郡湯町 同玉造村 大原郡中湯

同石村の内温泉地、仁多郡湯村

伯耆国 久米郡関金宿 同三朝村 同山田村

因幡国 気多郡勝見村 高草郡吉岡村 岩井郡岩井湯

石見国 那賀郡上有福村の内温泉場 同追原村の内美又温泉場

と記録されている。明治初年における山陰地方の温泉分布、規模の大きさなどを知る貴重な資料である。

当時の温泉宿の状況はどうだったのであろうか。明治30年頃の城崎温泉は旧態をすてて改装がさかんに行なわれたが、日清戦争後は漸次不況を呈して温泉客は減じ、明治以来最も不振な時を迎えた。しかし明治45年3月1日の山陰線全通によってようやく昔日の繁栄をみるにいたった。また明治40年当時の三朝温泉については『東伯郡誌』は“……近国有名の温泉にして四時浴客多く、1カ年平均35,000人を下らずという。……”。また同年発行の『因伯記要』によれば“胃腸、リウマチス、痔疾、子宮病その他に効験あり。三徳山の西2里、山陽の客多し。鮎の味頗る美。杜鵑裂帛、溪韻のため幽趣を添う。……”と記している。当時の温泉旅館は西藤館、岩湯、本油屋、木屋、御茶屋などがあり、貸間兼旅館としては中屋、花屋、煙草屋などであった。

さて文明開化は山陰地方にも及び温泉科学の波に洗われることになった。明治24年には堀正大郎博士は玉造温泉においてユレモの研究をはじめたが、これはわが国温泉生物学研究の嚆矢であった。また明治43年には関東地方、兵庫県の鉱泉などを中心に温泉調査を進めていた石谷伝市郎理学士らが「温泉に含有するエマナチオンと鉱泉効果との関係」など多くの温泉論文を発表し、ラジウムエマナチオンの人身に及ぼす効果などの新しい分野の開拓者となった。さらに特筆すべきはパナマ太平洋博覧会に発表すべく全国的に温泉調査を進めていた石津利作薬学博士によって三朝温泉が世界第2位のラジウム泉、高温泉では世界第1位であることが江湖に発表されたことである。これは山陰温泉史上最大の快哉事であったが、三朝村では大正7年、この三朝温泉の豊富な放射能を医学的温泉療法に役立てるべく三朝村営ラジウム温泉療養所を設立した。昭和14年に開設された岡山医科大学三朝温泉療養所の前身である。

大正14年の北但大地震により全町潰滅の悲運をうけた城崎温泉にはこのころからすでに多くの文人が訪れ、数々の紀行文が発表され、山陰地方の温泉もこれらによって、次第に全国的に名を

はせることになった。全国各地の温泉地では鉄道院の『温泉案内』(大正9年)を機に温泉組合などによる温泉案内書が発行されて遊客をさそったが、温泉地のPRも積極的に展開をはじめることになった。山陰地方ではこの頃発行されたものを手もとからあげてみると

- 明14 三宅竹隠「城崎温泉雑誌」
- 明24 ラフカディオ・ハーン「鳥取の蒲団」……東郷・浜村
- 明28 齊藤甚左衛門「但馬城崎温泉案内記」
- 明40 市教委「鳥取案内記」
- 大2 但馬城崎温泉事務所「城崎温泉誌」
- 大3 寛道三「吉岡温泉案内」
- 大6 志賀直哉「城の崎にて」
- 大7 田山花袋「温泉めぐり」
- 大11 田山花袋・中沢弘光「温泉周遊」
- 大12 県温泉協会「鳥取県の温泉」

などがある。

7. 昭和時代(1926～)

昭和4年「日本温泉協会」が創立され、全国的な組織による温泉行政、施策そして理学、工学、医学など各分野における活動が展開される気運が抬頭した。一方温泉研究の成果も多くの文献となってつぎつぎに発表されはじめた。藤浪剛一著『東西沐浴史話』、『温泉知識』、西川義方著『温泉と健康』、『温泉須知』、『温泉読本』、『温泉言志』、小沢清躬著『有馬温泉史話』、酒井谷平著『温泉及気候療法の理論と実際』、高安慎一著『温泉医学』などである。一方日本温泉協会でも昭和5年から月刊機関誌『温泉』の発行をはじめ、昭和10年にはわが国温泉及び温泉に関係深い学会の権威による『温泉大観』を発刊した。

さて山陰地方では京都帝大の石川成章理学士がその著『本邦温泉論考』の中で京都府木津温泉、山陰道とくに鳥取県の温泉について温泉理学的見地から詳述している。昭和3年松原博士は「三朝温泉源の配置」と題して三朝温泉の泉源調査記録を残した。昭和8年中村清二博士は依山温泉の温泉喇叭飲み、夜通しの湯などの風習について論じるなど各温泉地の紹介誌の発刊とならんで各分野での研究成果がつぎつぎに発表されている。しかし戦前山陰地方で温泉史に特筆すべき出来事は昭和14年岡山医科大学によって九大、北大について全国第3番目の岡山医科大学三朝温泉療養所が開設され、以来西日本の温泉医学のメッカとなったことである。

文人の来陰は相変らず続いたが、野口雨情の三朝小唄

くもりゃ三朝が雨となる 雨情

がつくられたのは昭和2年であり、藤村が城崎、岩井、三朝の温泉をめぐって『山陰土産』に紹介したのもこの年であった。また島根湯抱温泉の鴨山を万葉の歌聖「柿本人麿終えんの地」と発表して、当時の学界で大きな反響を呼んだ齊藤茂吉は昭和10年頃しばしば石見地方に足をはこんでいる。

大太平洋戦争が終って、昭和23年「温泉法」が制定されて、温泉資源の保護、開拓またその利用法の適性化がはかられるようになり、大衆旅行時代の夜明けが戦後の復興とともに展開されることになった。新泉源の開発、旅館設備の近代化、積極的な観光、各種のPR対策によりたんにこの傾向に拍車がかげられたが、昭和29年の国民保養地、昭和31年の国民宿舎などの制度により山陰地方の温泉地がつぎつぎに指定をうけたことは、遅れがちな山陰温泉観光に愁眉をひらくことになった。三朝(その後解除)、依山、鹿野、吉岡、関金、三瓶、鷺の湯、湯原、奥津など山陰地方のこれら温泉地の指定度のシェアは高い。